

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：34510

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770250

研究課題名(和文) 宋金元代中国における石刻「文書」の歴史的展開

研究課題名(英文) Historical developments of official documents on stone inscriptions during the Song, Jin and Yuan period in China

研究代表者

小林 隆道 (Kobayashi, Takamichi)

神戸女学院大学・文学部・専任講師

研究者番号：40727335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：12世紀の北宋末期の中国では、公文書を石碑上に精巧に復原して刻ざむ石刻「文書」が出現した。その石刻「文書」は中国において20世紀初頭まで作成され続ける。本研究では、宋金元代において石刻「文書」がどのように中国に定着していったのかを、歴史学の立場から考察した。その際、石刻「文書」を政治・文化・地域の凝集物として位置づけ、美術史や宗教学といった多分野を横断する研究成果を国際的に発信した。

研究成果の概要(英文)：After 12th century, "stone documents" were made in China. They were official documents carved on the stone inscriptions. They had been made until the beginning of 20th century. This research considered "stone documents" as the aggregate of politics, culture and regional order, and examined how the "stone documents" developed during the Song, Jin and Yuan period in China from the view of history. The research results contributed to many academic fields. Chinese art history and religious studies, for instance.

研究分野：宋金元代中国史

キーワード：中国史 史料学 文書研究 石刻「文書」 碑刻 情報伝達 学際的研究

### 1. 研究開始当初の背景

本研究が考察対象とする10～14世紀の宋金元代中国に関し、近年における国際学界には二つの大きな動向が出現している。一つは情報伝達という主題が国際的な広がりをもって共有されつつあること。もう一つは多分野を横断する学際的研究が進められていること。この二つの動向を強力に推進する大規模なプロジェクトが各国で既に始動している。つまり、現在の学界状況は今後の新しい研究の枠組みが国際的に形成される「初動期」に当たっている。このような学術動向の中で、自己の研究をどのように日本から発信していくべきかを今後の切実な問題としてとらえ、本課題の申請に至った。

### 2. 研究の目的

情報伝達と学際的研究をキーワードとして今後の新しい研究の枠組みが国際的に形成される「初動期」の中にあって、多分野を横断する問題が凝縮する石刻「文書」を扱う本研究は、歴史学の根本となる史料論も含めた考察も射程に入れた。そのような史料論的考察に基づき石刻「文書」が当該時期にどのように展開したのかを明らかにし、その知見を国際的に共有される主題に対し発信することが本研究の目的である。また、それにより、前述の「初動期」に参画し、その後の国際的な議論において日本の中国史研究が発言権を得るための布石となることも期待する。

### 3. 研究の方法

公文書を刻む石刻「文書」は北宋期を転換期とし中国の社会・文化に根ざして独自に形成した文書形態である。しかし、従来は石刻「文書」の文書内容のみが注目され、それが持つ多面性は見過ごされてきた。そこで、本研究は、宋金元代の石刻「文書」を中国の政治・文化・地域の凝集物としてとらえ、それら三者の中で石刻「文書」がどのように歴史的に展開したのかを考察し、「情報伝達」と「学際的研究」というキーワードに特色づけられる現在の学界動向に対し新知見を提出する。それについて、以下3点に分けて説明する。

(1) 文書を統治制度の「循環器系」ととらえる。血液が人体の各組織を巡り物質をやり取りして生命を維持するように、文書は官司間或いは官と民との間を巡り必要な情報を受け渡しする。この視点により、当時の情報伝達を前述した「活きた」制度史として描く。

(2) 中国文化における「書」に注目し、文書の視覚情報を重視する。従来、宋代史では文献資料中に収録された文書を扱い文書研究が進められてきた。だが、文献資料は文書が本来有していた書体等の視覚情報を削ぎ落とし、語彙的に同じ文字を全て同じ情報として処理する。しかし、文書上の文字は抽象的な情報では決してなく、書体を伴った状

態で具体物に定着されて伝達された。本研究は石刻「文書」をモノとして捉え、その外観・形態も重視し、石刻「文書」の原碑・拓本を参照する。この特色は歴史学と美術史との融合という学際的研究を可能とする。

(3) 石刻「文書」をモノとして捉える視点は、石刻「文書」は政府の意図を持つ公文書であると同時に文書受領者の意図により刻石されたことを強く意識させる。碑刻としてある場所に立ち機能を果たしていた石刻「文書」は、その地域の秩序から出現し、且つ秩序を形成したと想定できる。文書上の文字(情報)は紙から紙へと史料体を乗り継ぎ、そして最終的には、あたかも血液が体外に出ると凝固するように、文書も統治制度からその外部に位置する民間施設へ出ると史料体を紙から石へと乗り継ぎ凝固し、石刻「文書」となったと言える。本研究は石刻「文書」を単なる原文書のコピーと見なすのではなく、その碑自体が「現地」で有した意味や機能を考える。それをフィールドワークの中で実行し、自らを「資料の史料化」プロセス(近藤一成「フィールド歴史学」の提案(2008)に置き、史料論も含めて考察を進める。

### 4. 研究成果

上述したように、現在の国際的な学界動向において「情報伝達」と「学際的研究」が重要な課題となっている。それに対して新知見を提起するべく、本研究ではまず宋代の賜額勅牒を刻んだ石刻「文書」を具体的な考察対象とした。特に、拓本を利用して視覚情報を重視し、その書体を石碑上にどの程度復原したのかについて、当時の政治状況を含めた考察を「5. 主な発表論文等」〔雑誌論文〕として中国語で発表できたことは、国際的に成果を発信することも課題とする本研究にとって意義が大きかった。これにより、中国の華南学派の学会に参加し「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕を発表する機会を得た。華南学派は特に明清時代以降の「民間歴史」をフィールドワークの手法で考察して成果を挙げているが、そのような考察対象時代や分析方法が異なる研究者と学術的な意見交換ができる場を得たことは、「学際的研究」を目指す上で極めて重要であり、今後も連携して研究を進めることが期待できる。

また、この刻石された賜額勅牒の有する視覚情報を重視した上で、それが立石された地域でどのような役割を果たしたのかについての考察をアメリカ・ハーバード大学で開催された学会で発表し(「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕)、欧米圏の研究者に向けて発信した。これは、石刻「文書」が政治制度だけでなく地域秩序や文化の問題を考える上で有用な要素を持ち、欧米圏における研究文脈にも対応できる特色を活かしたものである。そこでの学術的交流の結果、2017年9月にオランダ・ライデン大学で開催される2回目の学会に参加し研究発表することが決

まっている。

また、宋金元時代の石刻「文書」を、当時の刻石習慣とも言うべきより広い文脈の中で考察するために、蘇州玄妙觀の元代碑刻「玄妙觀重修三門記」(以下、「三門記」と略称)を取り上げた。この碑刻は趙孟頫の書として誰もが知る非常に有名な作品であり、その原稿は東京国立博物館に所蔵され、元代を代表する書法作品として位置づけられている。そのため、これまで美術史や書法史の中で考察されてきた。しかし、その「書法」にのみ注目が集まり、碑刻として作成された歴史的背景は十分に明らかにされてこなかった。そこで、本研究ではその「三門記」をモノとして歴史学の立場から考察し、その碑刻が当時の社会に対して有していた意味を明らかにした。その際に注目したのが、「三門記」の撰文者である牟巖である。牟巖は南宋末に官僚であったが、南宋が滅亡し王朝が元に交替して以降、隱者として名声を得ていた。その隱者・牟巖と、元代に官僚として栄誉を極めた趙孟頫との合作という興味深い事実から出発し、南宋末から元初にかけて江南士人たちの具体的な動向を跡付けた。これは、書が文章内容の情報と書体といった視覚情報の双方を持ち、それらを石碑に刻むことの意義を考察したものであり、同様な性質を持つ石刻「文書」が展開し得た当該時期の特質を明らかにしたものである。

この成果について各種学会で報告をしたが、特に、歴史学だけではなく文学や美術史の研究者が集結した台湾の研究プロジェクト「游於芸」を総括する学会において発表できたことは意義が大きい(「5. 主な発表論文等」〔学会発表〕)。それらの場で行われた学術的な意見交換に基づき、内容を深化させ、「5. 主な発表論文等」〔雑誌論文〕として公表した。

なお、この考察のために、牟巖の文集である『陵陽集』の版本調査を日本の静嘉堂文庫、中国の国家図書館・北京大学・社会科学院国家科学図書館、台湾の国家図書館で行った。このような文献学・史料学的な調査に基づいた成果であることを強調しておきたい。

同様な文献学・史料学的な調査にもとづく成果には、道教関連のものがある。道教経典を収録する『道蔵』中に、宋代の石刻「文書」に関する史料群を発見した。その史料群中には、南宋末期における茅山の道教教団への加封勅牒だけでなく、それが発給されるに至る以前に教団と政府との間でやり取りされた公文書が収録されていた。従来は、刻石された(既に発給された)公文書の状態しか分からない史料環境であった。だが、当該史料により、公文書が発給されるまでにどのような経緯があるのかという制度史に関する知見と、そのようなやり取りを経て得た公文書とその石刻「文書」が受領側或いは立石地においてどのような役割を担ったのかについての知見が得られた。この成果は「5. 主な発

表論文等」〔学会発表〕で発表した。その際、道教研究者から有用な意見をもらうことができ、また今後の研究協力が期待できる。

本研究では、石刻「文書」が「情報伝達」を巡って有した多様な側面について、歴史学の立場から考察し、その成果を美術史や宗教学といった他分野に提起した。そして、研究成果を国際的に発信する場において、他分野の研究者と学術的な交流を持つことができたことにより、今後の国際的な研究協力の基盤を作ることができたと言える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

小林隆道、顕隠相交-宋末元初の陵陽牟氏と「玄妙觀重修三門記」-、『宋代史から考える』汲古書院、査読有、2016、pp.225-255

小林隆道、2015年の歴史学界-回顧と展望-五代・宋・元、史学雑誌、査読無、第125編第5号、2016、pp.222-228

小林隆道、宋代的賜額勅牒与刻石、『民間歴史文献論叢：碑銘研究』、査読有、2014、pp.94-117

〔学会発表〕(計14件)

小林隆道、顕隠相交-宋末元初の陵陽牟氏与「玄妙觀重修三門記」-、第八届民間歴史文献論壇(国際学会)、2016年11月27日、厦門大学、厦門、中国

小林隆道、宋代加封“儀式”与文書-以淳祐九年加封三茅真君為例-、“文本・儀式・権力：多元視角下的宋代研究”国際青年学術会議(国際学会)、2016年11月5日、上海師範大学、上海、中国

小林隆道、顕隠相交-宋末元初の陵陽牟氏与「玄妙觀重修三門記」-、“十一-十三世紀東亞史的新可能性”首届中日青年学者宋遼西夏金元史研討会(国際学会)、2016年9月24日、復旦大学、上海、中国

小林隆道、宋代転運使之“模範”-“熙豊”政治对地方統治的影響-、“10至13世紀中国史”国際学術研討会暨中国宋史研究会第十七届年会(国際学会)、2016年8月20日、中山大学、広州、中国

KOBAYASHI Takamichi、Negotiating “Exemplar” Fiscal Commissioners in Song China, 960-1279、AAS-in-Asia(国際学会)、2016年6月26日、Doshisha University、Kyoto、Japan

小林隆道、宋末元初の陵陽牟氏と江南統治、

平成 27 年度九州史学会大会、2015 年 12 月 13 日、九州大学、福岡、日本

小林隆道、牟ケ『陵陽集』と「玄妙觀重修三門記」、第二屆東亞漢籍交流國際學術研討會(國際学会)、2015 年 12 月 4 日、南京大學、南京、中國

小林隆道、李如鈞「宋末地方學者之獻力：歐陽守道的關懷鄉里作為」へのコメント、2015 年 8 月 28 日、第 41 回(平成 27 年度)宋代史研究会、休暇村志賀島、福岡、日本

小林隆道、「仮面の書」の告白-趙孟頫書・牟ケ撰「玄妙觀重修三門記」作成背景にある宋元士人社会-、第 178 回宋代史談話会、2015 年 6 月 20 日、大阪市立大学、大阪、日本

小林隆道、顯隱相交-〈玄妙觀重修三門記〉撰者牟ケ一族与宋元士人社会-、游於芸：十一至十四世紀士人的文化活動与人際網絡(國際学会)、2015 年 6 月 13 日、長庚大学、桃園、台灣

小林隆道、宋代から読み解く中国怪異譚、東洋文庫談話会、2015 年 3 月 9 日、東洋文庫、東京、日本

KOBAYASHI Takamichi、Between Paper and Stone: A case of the Song Document Carved on Stone during the Jin Dynasty、“10 至 13 世紀中国国家与社会”國際學術研討會暨中國宋史研究会第十六屆年會(國際学会)、2014 年 8 月 20 日、百瑞運河酒店、杭州、中國

小林隆道、歴史研究における Digital Humanities の射程-劉馨 jun「GIS 的応用：南宋黒風 dong 変乱(1206-1211)探析」へのコメント、平成 26 年度宋代史研究会、2014 年 8 月 5 日、民宿大原山荘、京都、日本

KOBAYASHI Takamichi、Style of Document and Handwriting: between “Paper” and “Stone”、Conference on Middle Period China, 800-1400(國際学会)、2014 年 6 月 6 日、Harvard University、Boston、USA

〔図書〕(計 1 件)

『宋代史から考える』編集委員会(飯山知保・久保田和男・小二田章・小林隆道・高井康典行)編、汲古書院、『宋代史から考える』、2016、455

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 隆道 (KOBAYASHI, Takamichi)  
神戸女学院大学・文学部・専任講師  
研究者番号：40727335